

高等学校における四技能統合型授業の実践と成果

中村 隆道

要旨

令和4年度より年次進行で実施される高等学校の新しい学校指導要領においては、「主体的・対話的で深い学び」の実現が重視され、英語教育においても、アクティブ・ラーニングを取り入れた（四技能）五領域を伸ばさせる統合的な指導が求められている。

筆者が勤務する高等学校は、長い歴史と伝統をもち、英語科においても効果的な指導法については多大な蓄積がある。しかし一方で、激動するグローバル社会で求められる英語力の育成について、柔軟性をもって十分に対応しきれていないという側面もあった。6年前に四技能統合型授業へと舵を切り始めた当初は、成績低下を憂慮する声も多かったが、生徒の真摯な取組と教員たちの情熱によって、生徒たちの英語力は伸長していった。

本稿では、本校が指導の方向性を改善していった経緯、そして現在第一学年で実践している四技能統合型授業の実践例と、それについての生徒のフィードバックを示し、さらに生徒の英語力が確実に伸長しているデータを示す。

1. はじめに

令和2年度より小学校では新しい学習指導要領が全面実施され、小学校3年生から外国語活動が始まるなど、英語教育の充実、特にコミュニケーションにおける運用力重視の必要性が共通認識となりつつある。アクティブ・ラーニングを取り入れた四技能統合型の授業開発についても知見が深まり、徐々に実践が広がっている。高等学校においても、そういった授業実践が浸透しつつある一方で、依然としてペーパーテスト式である大学入試という現実的な問題を抱えており、必ずしもそういった実践が主流になりきれていないという側面があり、現場でも日々議論が行われている。

筆者が勤務する高等学校では、英語科教員の授業改善、教材開発をとおして、四技能を統合した英語力の育成を目指している。生徒の熱心な取組により、CEFRを評価スケールとする「ケンブリッジ英検」でも着実に成果を上げ、またいわゆる大学受験を想定した予備校等の作成する全国模擬試験等でも堅調な結果を出している。

大学入試センター試験においても、平成29年度より外国語「英語」の学年全体の平均点が3年連続で9割以上を達成した。最後のセンター試験となった令和2年度においても、平均点が前年よりも7.4点減とかなり難化したにもかかわらず、本校の平均点の減少は4.7点に留まり、実質的には前年を大きく上回っている。後述するが、このように高い平均点を出し始めた時期は、四技能統合型の授業を取り入れた学年が卒業を迎えた時期と一致することは注目に値する。

伝統的な英語教育のもとで生徒たちは一定の成果を上げてきたが、四技能統合型の授業を取り入れてからさらにその力を顕在化させ、CEFRのようなグローバル・スケールにおいても、大学入試のための模擬試験等においても、国内トップクラスの成績を安定的に出し始めた経緯について述べていく。

2. 本校が抱えていた課題

長い伝統に裏付けされた本校の英語教育の質の高さには定評がある。専門書の蔵書の多さ、教材のレベルの高さ、考查問題の質や量、作問の厳しき、年度末の総括科会など他校には比類がないと思われる数々の日比谷ならではの財産がある。それは今日の英語科の教育力の礎となっている。

しかし一方で、時代に流されない確固たる教育理念があるからこそ、ある意味では変革期にあっては、軽々に変質することを恐れ、迅速に対応しきれない側面もあったように思われる。

平成26年に私が本校に着任した時には、いわゆる伝統的な指導法が主流であり、座学中心の講義形式が多くみられた。課題としては以下のようなものがあった。

- ・ 授業は訳読式で、生徒が英語で発話する機会はほとんどない。
- ・ リスニング教材等での演習はあるが、話し手の意図を把握するような活動はほとんどない。
- ・ 相当量の英文を読むが、内容理解が中心で、書き手の意図を把握したり、英文を目的に応じた捉え方をしたりするような指導が十分ではない。
- ・ 相当量の和文英訳問題を扱うが、論理性に注意してまとまりのある文章を書く機会が少ない。

着任して直ぐに1学年担任となり、学年生徒に対して大きな責任を感じ、四技能統合型の授業運営を模索することとした。しかし前述のように、伝統的な方式からの脱却は周囲の十分な理解を得られず、新しいアプローチには懐疑的な声が多く聞かれた。以下のような不安点が聞かれた。

- ・ 文法力が落ちて、正確性の低い文章しか書けなくなるのではないか。
- ・ 吸収する知識が少なくなることはもとより、思考力が落ちるのではないか。
- ・ 帰国子女だけが活躍する授業にならないか。
- ・ 模擬試験でも受験でも点数が取れなくなり、進路実績が落ちるのではないか。

特に「進学実績」について憂慮する声が大きく、導入は厳しい状況であったが、授業運営を全面的に変えるということではなく、部分的に四技能統合型の要素を導入する、という提案からスタートした。以下が提案内容であった。

- ・ 「コミュニケーション英語Ⅰ」における発表活動の導入
- ・ 視聴覚教材の導入
- ・ 英語使用を促すための英語での授業
- ・ 授業の最後に 60～80 語のまとまった英文を書く活動
- ・ 定期考査は英語で作問
- ・ 提出物の徹底(家庭学習の徹底)

最後の事項である「提出物の徹底」については、四技能統合型の授業導入に一見関係のない提案に思われるが、実際は大きな課題である。伝統的な授業においては、本来的には自分自身で進めるべき学習内容を授業で行っていることが少なくない。それが「時間が無い」等の四技能統合型授業の導入を不可とする根拠となっている部分でもある。もちろん、以前は自主的に学習を進めるエイドが少なかった時代背景もあるかもしれないが、現在では情報へのアクセスが容易になり、学習を支援するデバイスやアプリケーションも充実しており、ほとんどの生徒がそれらを活用できる状況にある。「授業で扱うべきこと」を精査し、自主学習が可能なものとそうでないものを分けて考える視点が必要である。ただし、自主学習として生徒に委ねたものは、その進捗についてのモニターが必要であり、取組が不良な生徒には指導が求められる。本校ではすべての提出物の提出状況を記録しており、追指導も行っている。

新しいスタイルでの指導は、開始当初は生徒側にも戸惑いが見られたが、一学年の秋口になると生徒の取組方も次第に積極的になり、発表活動等ではより主体的に参加する態度が見られるようになった。後述するが、当該生徒たちに行ったアンケートでも授業に対する評価はとても好意的なものであった。四技能統合型の授業は、言わば「生徒に背中を押される」形で拡大し、さらに改善されていくことになった。憂慮されていた模擬試験等での結果も向上し、周囲の理解も少しずつ得られるようになり、それと並行して授業内容も幅をひろげ、さらに進化していった

つぎに、新しい取組の中でも、特に生徒が主体的に取り組むようになり、四技能統合型への授業と大きく潮流を変えていった活動について紹介する。

3. 1年生で定着した「プレゼンテーション活動」

1年生の「コミュニケーション英語Ⅰ」において導入した「プレゼンテーション活動」は、生徒の言語活動に対するモチベーションを大きく上げることになり、他の活動への取組にも肯定的な波及が見られた。

プレゼンテーション活動で行う具体的な活動は以下のとおりである。活動はすべて英語をとおして行われる。

3.1 プレゼンテーション活動 (発表側)

- ① 4人グループで発表する。発表グループは放課後等を活用し、発表用のパワーポイント資料を事前に作成し、発表の練習をしておく。4人グループのうち1人は教科書本文のサマライズを行い、残りの3人は教科書本文の内容に関連した事項について発表を行う。

(例)

教科書本文のテーマ:人種差別問題

生徒1:本文内容のサマライズ

生徒2:国内の人種差別問題について

生徒3:国外の人種差別問題について

生徒4:LGBT*に関する日本の対応について (生徒2、3、4が扱った内容についての今後への提言)

(注) LGBTとは、Lesbian (女性の同性愛者)、Gay (男性の同性愛者)、Bisexual (両性愛者)、Transgender (性別移行) の頭文字をとって組み合わせた言葉で、性的少数者を表す言葉の一つとして使われることがある。

- ② 生徒は用意したパワーポイント資料をもとに、ポインターを使ってプレゼンテーションを行う。
(原則的に原稿は読むことはしない。それぞれの生徒の発表が「点」になることがないように、発表全体が一連の流れを持つことに留意させる。1人が1分以上話すことが原則であるが、実際には2～3分程度は話すことが多い。)
- ③ 発表終了後、ALTとJETからフィードバック等を受ける。
- ④ 自席に戻り、ワークシートを活用して自分たちのプレゼンテーションを「省察」する。
- ⑤ 聴衆側より受けた質問をそれぞれが分担して担当し、質問を書きとる。
- ⑥ 質問に対しての意見や考えをそれぞれが発表する。

3.2 プレゼンテーション活動 (聴衆側)

- ① ワークシートを活用し、プレゼンテーションの内容を書きとったり、発表者の評価を行ったりする。
- ② 発表終了後は、個人でワークシートを完成させる。
- ③ 4人グループで活動。それぞれが役割をもち、ワークシートを活用してプレゼンテーションに関する意見交換を行う。

グループ内での役割は以下のとおりである。

Discussion Leader→議論を進める進行役となる。

Note-taker→議論の内容を書いていく。ハンドアウト裏面のスペースにまとめる。

Question master→グループ内で決めた質問を、プレゼンテーションしたグループに伝える。

Time keeper→指示された時間で活動が行われるよう、グループをリードする。

- ④ 意見交換をとおして、プレゼンテーション・グループに対しての「質問」をグループで決める。
- ⑤ Question master はプレゼンテーション・グループの席まで行き、グループで決定した質問を口頭で伝える。
- ⑥ プレゼンテーション・グループが質問に答える準備をしている間、グループ・ディスカッションを継続する。

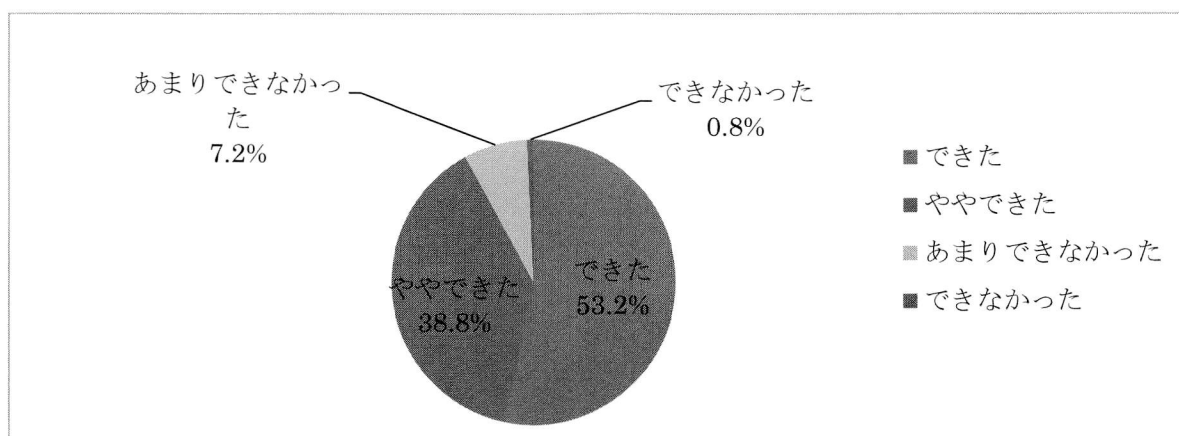
3.3 プレゼンテーション活動についてのアンケート

1 学年末に、プレゼンテーション活動を行ったクラスの生徒にアンケートを実施した。プレゼンテーション活動について、発表者側として、そして聴衆者側として積極的に、そして協力的に取り組めたかを聞き、さらにその取組をとおして改善できたと思われる技能についても聞いた。また、自由記述欄も設けた。グラフの下に関連した自由記述を示す。

設問1 プレゼンテーション活動（発表者側）に積極的に取り組むことができましたか？

(回答数 263)

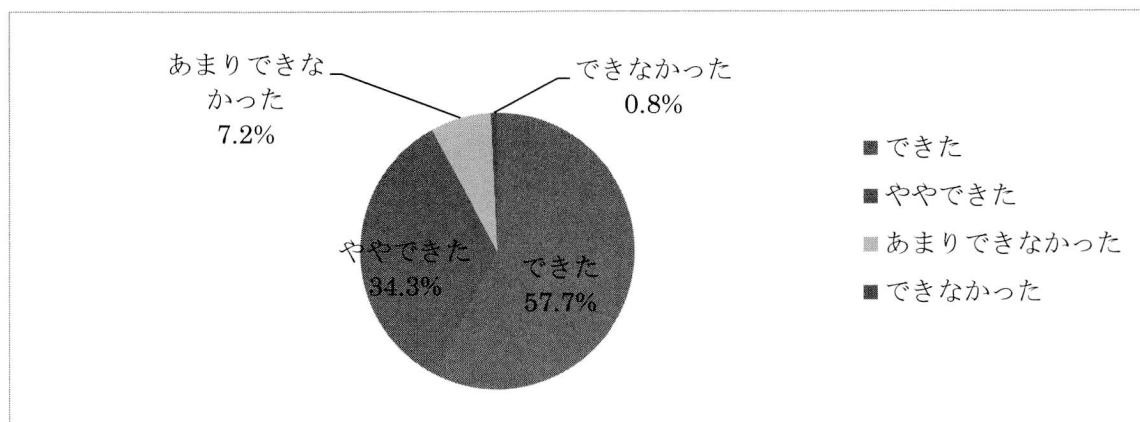
できた	ややできた	あまりできなかった	できなかった
140	102	19	2
53.2%	38.8%	7.2%	0.8%



- ・ プレゼンテーションにおいて、効果的な発表をするにはどうしたらよいか、どうしたら論理性を高められるか、グループ内でよく話して、互いに連携をとりつつ準備ができたと思う。
- ・ 発表者側として、前々から得意にしていたライティング力を話すことにつなげるのを意識し、原稿作成ではより「伝わる」表現をするように取り組んだ。

設問2 プレゼンテーション活動（発表者側）において、グループ内で協力して活動することができましたか？（回答数 265）

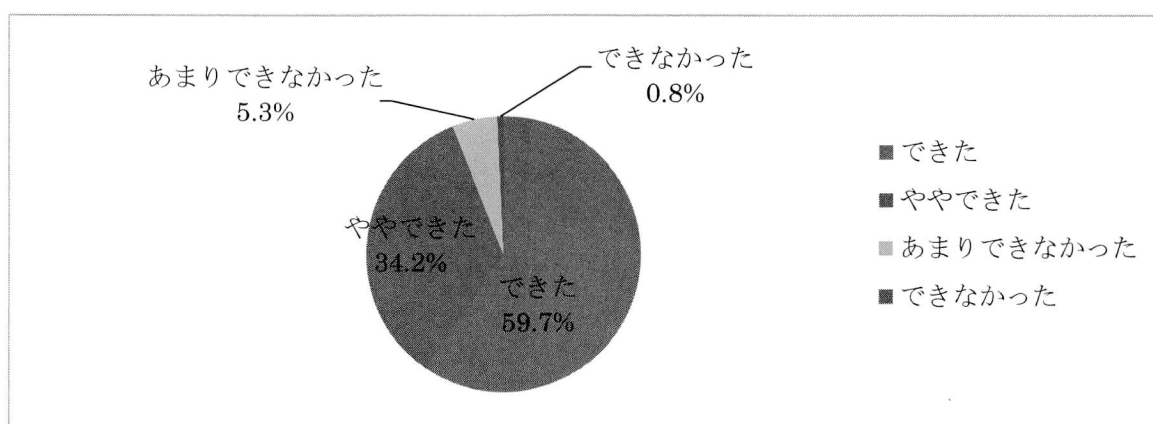
できた	ややできた	あまりできなかった	できなかった
153	91	19	2
57.7%	34.3%	7.2%	0.8%



- ・ グループのメンバーと協力してプレゼンテーションをすることができた。自分が発表をするときは、聴衆が聞きやすいように話したりして、工夫を凝らすのは大切だとわかった。
- ・ チームとしてのプレゼンとなるようそれぞれの発表を質問で繋げたり交互に発表したりと工夫することができた。

設問3 プレゼンテーション活動（聴衆者側）に積極的に取り組むことができましたか？（回答数 263）

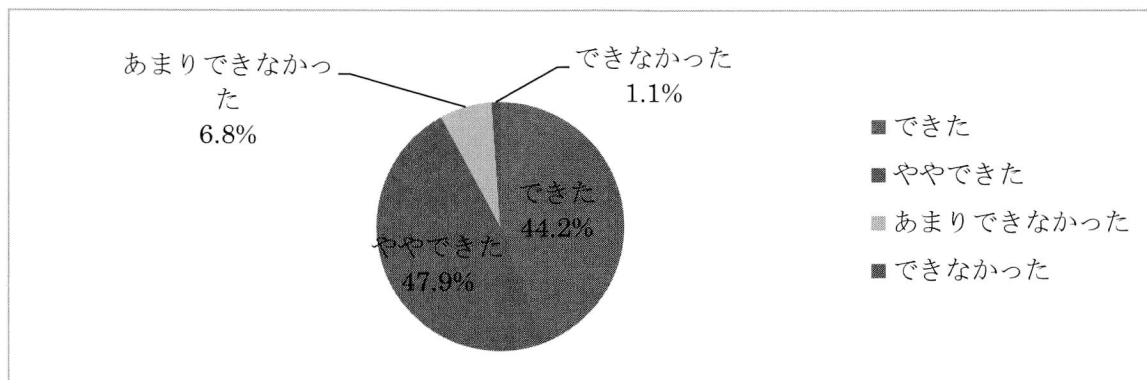
できた	ややできた	あまりできなかった	できなかった
157	90	14	2
59.7%	34.2%	5.3%	0.8%



- ・ 発表をする以外にも、そのほかにも、自分が聴衆者として話を聞いている面で、英語の力になっていくと思った。
- ・ 毎回の授業でプレゼンテーションが終わるとそれについて意見を言ったり、質問したりするため、自分でもしっかり話を聞こうと思うことができるし、より議論に積極的になれると思った。

設問 4 プレゼンテーション活動（聴取者側）において、グループ内で協力して活動することができましたか？（回答数 265）

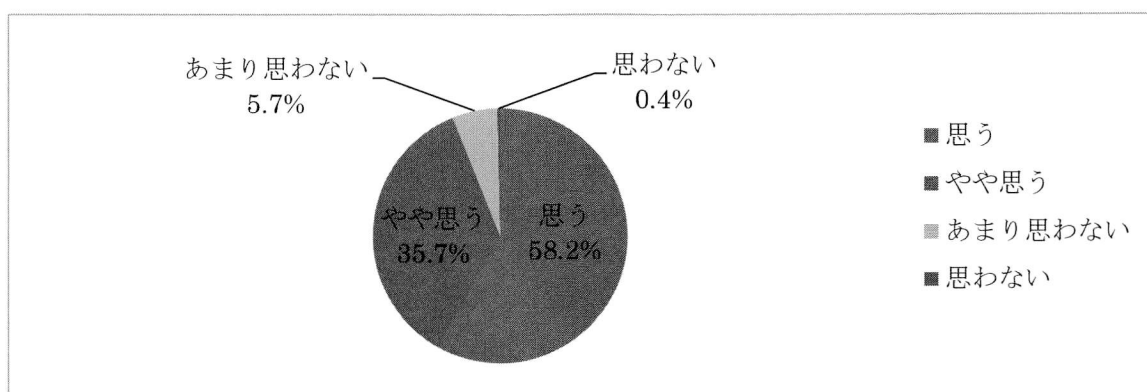
できた	ややできた	あまりできなかった	できなかった
117	127	18	3
44.2%	47.9%	6.8%	1.1%



- ・ 聴衆側では、英語を聞きとることはもちろん、その人の意見などをひろって自分たちではどうか考えることができた。知識はもちろん、そのことについて考え議論するのを当たり前にしたのは収穫だと思う。
- ・ 自分以外のグループについては、特に 2 回目はどんどんレベルが上がっていったので、とても刺激を受けた。他グループが次々に出してくる説得力のある表現方法に感激して、自分のグループ活動の参考にすることができた。

設問 5 プレゼンテーション活動をとおして、さまざま分野における知識や情報を増やすことができましたと思いますか？（回答数 263）

思う	やや思う	あまり思わない	思わない
153	94	15	1
58.2%	35.7%	5.7%	0.4%

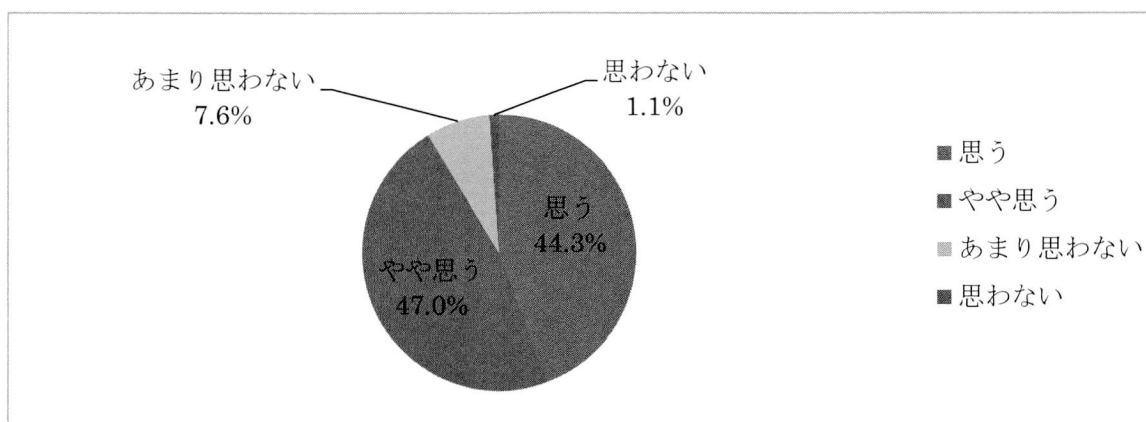


- ・ プレゼンテーションを作る上で必要な情報を沢山調べたので、それに関する知識とそれを英語で表現する知識が少しでも身についた気がする。
- ・ プレゼンテーション自体、最初から嫌いではなくて、積極的に取り組みたい気持ちが強く、聞いていても楽しいし、話す側でも楽しいので、様々な分野について広く教養が身についたと思う。

設問 6 プレゼンテーション活動をとおして、英語を「話す力」が伸びたと思いますか？

(回答数 264)

思う	やや思う	あまり思わない	思わない
117	124	20	3
44.3%	47.0%	7.6%	1.1%

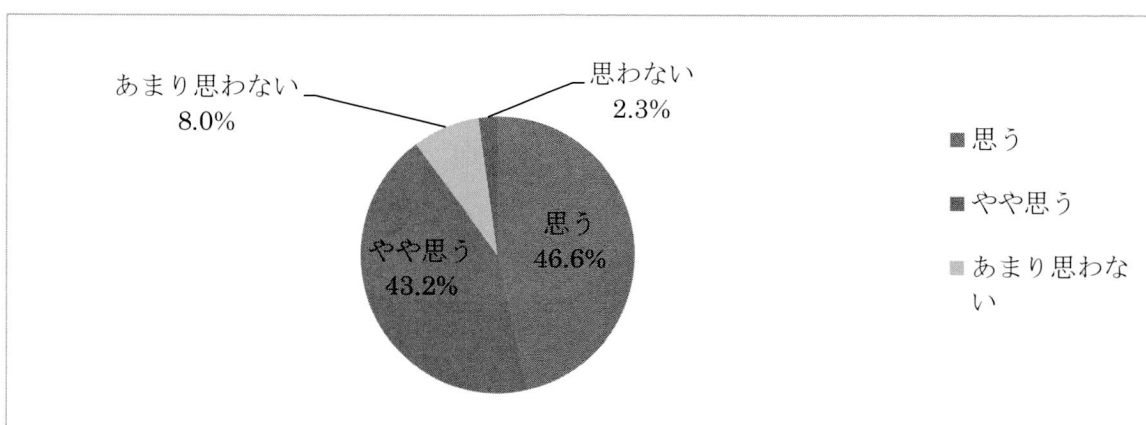


- ・ 自分も周りも内容やスピーキングそのものの質が上がったと思う。
- ・ 自分の言いたいことをしっかり話せた。質問にも短時間で答えられたので、話す力がついたと思う。

設問 7 プレゼンテーション活動をとおして、英語を「聞く力」が伸びたと思いますか？

(回答数 264)

思う	やや思う	あまり思わない	思わない
123	114	21	6
46.6%	43.2%	8.0%	2.3%

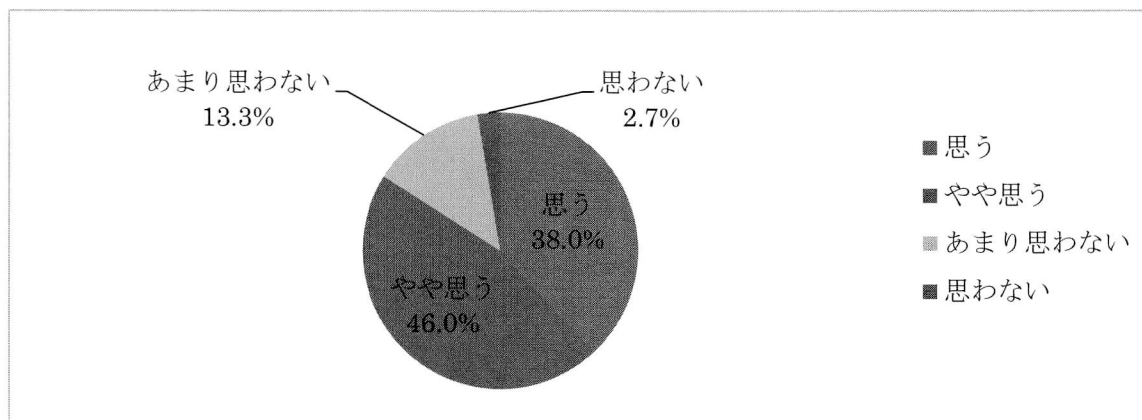


- ・ 英語の発表を聞くのも初めてで、前期は本当に何を言っているのかがわからなくてメモも全然取ることができなかったが、だんだんと聞き取ることができるようになり、最初の頃よりメモの量は格段に増えたと思う。
- ・ 英語で発表することはあまりない経験でした。最初のころに比べてかなりよく英語を聞き取れるようになった。

設問 8 プレゼンテーション活動をとおして、英語を「書く力」が伸びたと思いますか？

(回答数 263)

思う	やや思う	あまり思わない	思わない
100	121	35	7
38.0%	46.0%	13.3%	2.7%

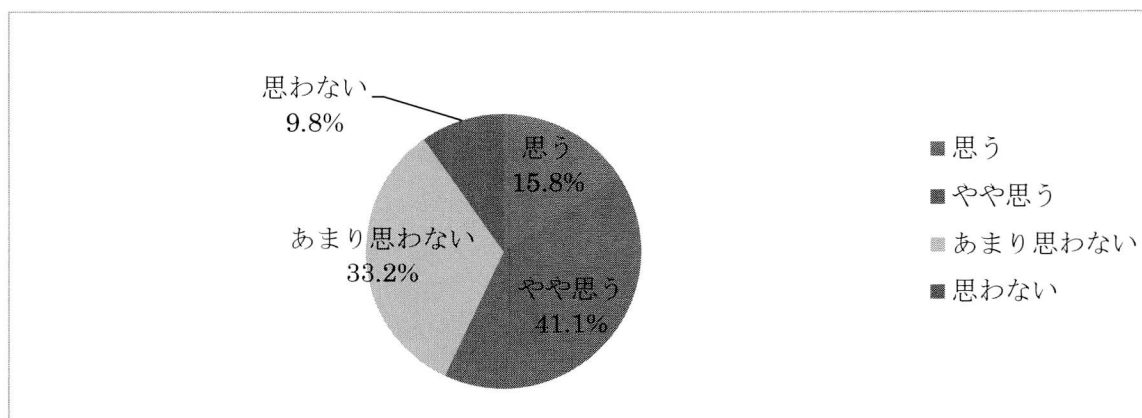


- ・ 回を重ねるごとにメモを取ったりパワーポイントをしっかり読んだりできるようになった。また、質問もたくさん思いつくようになった。書く量もプリントが最初は多く感じたが、スラスラ書けるようになって良かった。
- ・ テクニカルな文章をかくのではなく、いかに人に伝わる英文を書くことができるのかということを学んだ。

設問 9 プレゼンテーション活動をとおして、英語を「読む力」が伸びたと思いますか？

(回答数 246)

思う	やや思う	あまり思わない	思わない
42	109	88	26
15.8%	41.1%	33.2%	9.8%



- ・ 聞く側の時は、最初のうちはあまり聞き取れず内容があまり理解できなかったが回を重ねるごとにメモを取ったりパワーポイントをしっかり読んだりできるようになった。
- ・ 僕が4月にはじめてプレゼンを行ったときは調べ学習の延長線に過ぎなかったが、回を重ねるにつれて調べた内容から自分達の意見をのべることの重要性を理解できた。

アンケート結果および自由記述からもわかるように、活動的な授業に対してほとんどの生徒が肯定的な回答をしている。課題としては、「読む力」について、生徒自身が達成感を得られるような授業開発をしていくことである。

4 「ケンブリッジ英語検定」の結果における向上

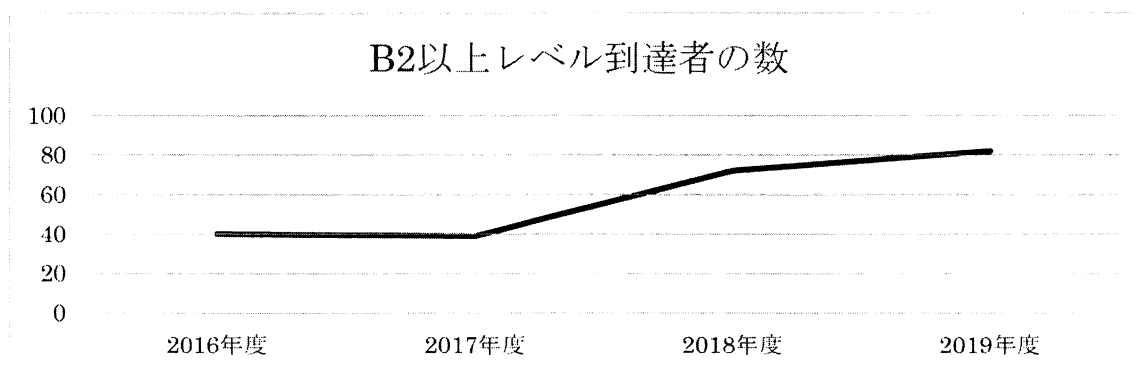
「ケンブリッジ英検」は、その検定受検者の能力を証明する目的やレベルに合わせていくつかの種類があり、それは CEFR における到達度や能力の目的別によって分類されている。本校では1学年で「B1 Preliminary (PET)」を、「B2 First (FCE)」を2学年で全員受検させている。本校における同検定の活用については、校内的な議論を重ね、東京都教育委員会からの補助を受けて平成28年より実施している。(中村 2017, 77-81)。

「FCE」の合格者は CEFR における B2 に相当し、文部科学省の「各資格・検定試験と CEFR との対照表」によれば、実用英語技能検定(英検)では準1級、TOEFLiBT では72以上、IELTS では5.5以上に相当するとされる。(文部科学省 2019)。本校では高校卒業時に半数以上の生徒に B2 に到達させる、高い目標を掲げている。

本校の2年生が毎年12月に受験している FCE の経年成績は以下のとおりである。数字は各レベルを達成した人数を示している。

	2019年度	2018年度	2017年度	2016年度
C1	4	4	2	8
B2	83	68	37	32
B1	161	189	194	166

B1 レベル以上の到達者数は確実に増え、特に B2 レベル到達者の数が大きく伸びている。四技能統合型の授業を導入した学年の1つ下の学年からのデータとなるが、活動型の授業が定着し、確実に英語の運用能力が向上していることがわかる。

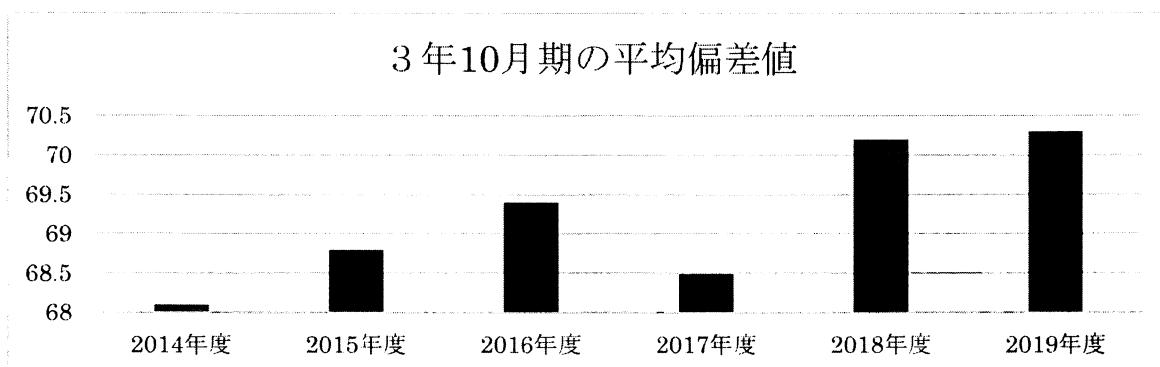


ここには示していないが、特に伸長を見せたのは Speaking と Writing の技能である。四技能統合型の授業においては、自らの意見や考えを発信する場面が必然的に増えるため、アウトプット領域に大きな改善が見られる。

5 全国模擬試験結果の改善

予備校等が作成する大学受験のための全国模擬試験は、入試問題対策に特化している部分があり、英文和訳や和文英訳等、検定試験とはその目的も問題形式も大きく異なる。1でも述べたように、授業改善の開始当初には、こういった模擬試験での成績低下を不安視する声が少なくなかった。ところが、結果は真逆のものとなり、四技能統合型授業への転換から、成績が大きく向上している。

以下は、3 学年 10 月時に実施される記述式の模擬試験であり、全国的にも受験者数が最も多い模擬試験の一つである。



2014 年度は 1 年次から四技能統合型の授業が導入された学年の生徒の結果である。2017 年度に一時的に落ち込みを見せたが、全体としては向上してきている。

4 の「B2 以上レベル到達者の数」のグラフと比較してもわかるように、CEFR における到達度を測る検定試験においても、大学入試対策を目的とした模擬試験等においても、同じような改善状況が見られている。「四技能統合型授業は受験には適さない」という根強い不安は、実際の結果とはかけ離れている。各技能をバランスよく身につけられていることで、問題形式に左右されない安定した成果を上げることができている。

6 まとめ

平成 26 年より始まった本校における四技能統合型授業への転換は、当初の懸念された事項が結果的には杞憂であったことが、さまざまな成果から証明されている。

現在は、英語科の四技能統合型の活動的な授業は全学年で行われており、英語科の教員も自信を持っており、校内的な信頼も得ている。新しいアプローチがネガティブにとらえられる声はほぼ聞こえなくなっている。

今後の課題は、さらに生徒が主体的に学びを深めることができるような授業開発を行っていくことである。“... successful learning is reflected in such a transfer of responsibility from the teacher to the learner” (Neil Jones and Nick Saville, 2017: 44) とあるように、学びの主体、いわば責任をどれだけ生徒に渡すことができるか、である。これまでにない授業のデザイン、評価方法が求められることになり、さらなる研究が必要になる。

また、現状の課題として、特に「読解力」の育成がある。活動に入る前に十分なインプ

ットを与えてはいるが、やはり読解については「本文理解」というレベルを超えておらず、批判的な思考や、類推力を伴った読解が十分ではない。さらなる授業開発が必要になる。

最後に、こういった実践を行うことができ、成果を生むことができているのは、日々真摯に勉学に励む生徒たちのひたむきな努力、そして日々前向きに指導にあたる同僚教員たちの情熱のおかげであることに改めて感謝を表したい。さらなる授業改善にむけて、今後とも研鑽を重ねていくつもりである。

参考文献

Neil Jones and Nick Saville. (2017). *Learning Oriented Assessment: A systematic approach*. : Cambridge University Press:

中村隆道. (2017). 「高等学校における CEFR の活用について」『2017 年度外国語学習指導要領改訂と教授・学習の到達目標の設定を巡って』. 財団法人 言語教育振興財団助成研究.

文部科学省. (2019). 「各資格・検定試験と CEFR との対照表」.

https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/03/_icsFiles/afieldfile/2019/01/15/1402610_1.pdf#search=%27cefr+%E5%AF%BE%E7%85%A7%E8%A1%A8+2019%27